

3 環境情報の収集・発信

センターでは、県民に環境意識の向上や環境保全活動を支援するため、環境学習情報のほか、試験研究情報、国際貢献情報など様々な情報をホームページで提供している。平成26年7月からは、フェイスブックを活用して、イベントや生態園の四季、センターの活動などの情報も発信している。

また、新聞による環境情報の発信や、センターの活動を広く知ってもらうためにニュースレターを発行している。

HPアドレス <http://www.pref.saitama.lg.jp/cess/index.html>〔平成28年度アクセス件数132,783件〕

フェイスブックページアドレス <https://www.facebook.com/saitama.kankyokagaku>

3.1 ホームページのコンテンツ

(1) グローバルナビゲーション

トップページ上段に、以下の4つの大分類を設け、サイト構成をわかりやすく整理。

- | | |
|------------|---------------------------------------|
| ア センターについて | 総長あいさつ、組織図、沿革、全景(航空写真)、パンフレットなどを掲載。 |
| イ 施設紹介 | 施設紹介、ご利用案内、展示館、生態園、環境情報プラザ、研修室などを掲載。 |
| ウ 試験研究の取組 | 試験研究の取組、研究課題、研究評価の取組、国際貢献、研究員紹介などを掲載。 |
| エ 環境学習・情報 | イベントのお知らせ、彩の国環境大学、身近な環境観察局、出前講座などを掲載。 |

(2) お知らせ

特に注目して欲しい情報を掲載。

(3) 新着情報

最新の更新情報を掲載。

(4) 環境学習・イベント情報

最新のイベント情報、社会科見学の案内など環境学習に関する情報を掲載。

(5) 研究所トピックス

ニュースレター、センター講演会など研究所に関する情報を掲載。

(6) お役立ちPickUp

イベント情報、ココが知りたい埼玉の環境、今月の里川などアクセスの多い情報を掲載。

(7) リンク

刊行物、地図で見る埼玉の環境 Atlas Eco Saitama、埼玉県生物多様性データベースなど。

3.2 ニュースレターの発行

センターが行っている試験研究の内容や様々な講座、イベントなどの情報を県民の方々に広く情報提供するためのニュースレター(A4版・6ページ)を平成28年度は4回発行した。なお、ニュースレターは、センターのホームページからも閲覧及びダウンロードができる。

(1) 第31号(平成28年4月発行)

「新総長ごあいさつ」

・研究・事業紹介 「「埼玉県環境科学国際センター講演会」を開催しました」

「中国山西省水環境保全モデル事業を行いました」

・ココが知りたい埼玉の環境(22) 埼玉県内ではどのような外来生物が問題となっていますか？

・環境学習・イベント情報

(2) 第32号(平成28年7月発行)

・研究・事業紹介 「生物起源VOC(BVOC)とPM2.5」

「地球温暖化と都市ヒートアイランド現象に関する研究」

・ココが知りたい埼玉の環境(23) 家庭から出るゴミは回収車が来て市町村の清掃センターに運ばれて処理されますが、産業廃棄物はどのように処理されますか？

・環境学習・イベント情報

(3) 第33号(平成28年11月発行)

・研究・事業紹介 「スリランカのごみ埋立地を調査」

「埼玉県内河川の浮遊細菌に関する研究」

・ココが知りたい埼玉の環境(24) 熊本で地震が発生して大きな被害が発生しています。将来関東周辺で大きな地震が発生した場合、埼玉県の地盤はどのような被害が問題となりそうでしょうか。

・環境学習・イベント情報

(4) 第34号(平成29年1月発行)

・研究・事業紹介 「新しい？環境汚染物質？塩素系難燃剤デクロラン・プラス」

「光化学オキシダントは植物にどのような影響を与えているのか？」

「第6回日中水環境技術交流会」

・ココが知りたい埼玉の環境(25) 埼玉県の水は、昔に比べてきれいになっているのですか？

・環境学習・イベント情報

3.3 センター講演会

当センターでは、広く県民に活動内容及び研究成果を紹介することにより、県民のセンターに対する理解と環境問題への関心を深めることを目的として「平成28年度環境科学国際センター講演会」を平成29年2月3日にさいたま市民会館うらわ(さいたま市浦和区)で開催した。「今、災害・事故等に求められる環境研究所の役割」をテーマとして、東京大学大学院の森口祐一教授が基調講演を行うとともに、センター研究員による研究成果・事例の発表及び研究活動紹介のポスター展示と解説を行った。センター講演会の参加者は209名であった。

(1) 基調講演

災害廃棄物問題と防災・減災のための学際連携

—東日本大震災・原発事故の教訓—……………東京大学大学院 教授 森口 祐一

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、日本周辺での観測史上最大のマグニチュード9.0という巨大地震であった。大津波を伴い、三陸沿岸をはじめとする東日本の広い範囲にわたって甚大な被害を与え、原子力発電所の炉心溶融事故を招いた。この大震災に伴い災害廃棄物処理問題と放射性物質で汚染された廃棄物問題が発生した。これらの問題に対処するためには、「縦割り」による連携不足にならないよう防災・対策に関する学際連携を深める必要がある。また、東日本大震災の経験から、科学・技術面での知見の蓄積の重要性とともに、制度や組織的な対応にも改善の余地が大きいこと、また、産・官・学・民での情報共有や連携も災害時の対応における重要な課題があり、平常時の人的なつながりや情報交換が必要である。

(2) センターの研究成果・事例紹介

アルミ残灰の発熱事故に対する技術的対応 ……………資源循環・廃棄物担当 専門研究員 鈴木 和将

平成22年5月、空き地の穴の底に溜まっていた水とアルミ残灰が反応して熱が発生するとともに、アンモニアを含む水蒸気が多量に発生し、近隣の住宅まで悪臭が漂うという事故が起きた。この事故に対する事故直後の初動対応とその後実施した技術的対応について紹介した。

県内における水質事故と環境科学国際センターの取り組み

—事故対応を支援する分析技術の紹介— ……………水環境担当 専門研究員 柿本 貴志

水質事故は、人への健康被害、水生生物や生活環境への悪影響を及ぼすおそれがある。県内で発生している水質事故の概要や水質事故が発生した際の対応などについて紹介した。

県内河川における浸透性殺虫剤の汚染実態

—ネオニコチノイド系殺虫剤とフィプロニルについて—……………化学物質担当 主任研究員 大塚 宜寿

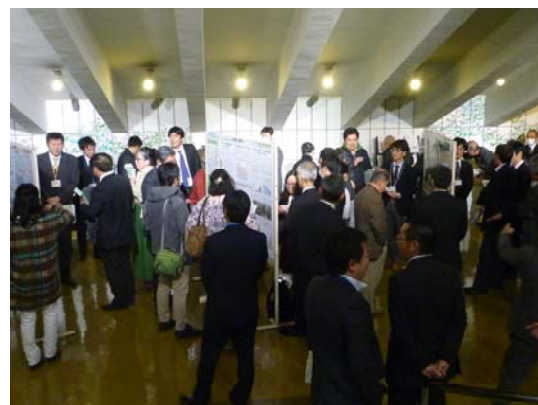
ネオニコチノイド系殺虫剤を代表とする浸透性殺虫剤は、吸汁性や食害性の害虫に効果的に作用するが、一方で害虫でない昆虫に対する悪影響が心配されるようになってきた。環境汚染物質としての関心が高まりつつあるこの殺虫剤について、県内河川における汚染実態について紹介した。

(3) センターの活動紹介

各担当がその活動概要を紹介するポスターを展示し、参加者に説明するとともに、質問に答えた。



基調講演



ポスター展示

3.4 環境情報の提供

(1) モニタリングデータの提供 (CO₂)

環境科学国際センターは、さいたま市(1991～2000年度)、堂平山(1992年度～)及び当センター(2000年度～)において、地球温暖化原因物質である大気中のCO₂の濃度を観測してきた。測定に当たっては、世界気象機関標準ガスを基準としており、観測データについては、温室効果ガス世界資料センター(WDCGG)へ提供することにより、国連世界気象観測機構(WMO)の観測網を通して世界各地に供給した。平成21年10月からは、当センターの観測結果(速報値)をセンターホームページに掲載(自動更新)し、公開している。

(2) 環境情報の海外への発信

ホームページに英語版、中国語版のパンフレットを掲載するとともに、英語版ホームページにより研究成果や研究員紹介などを掲載し、海外に向けた情報発信を行った。

3.5 マスコミ報道

センターの試験研究、環境学習等に関して記者発表を行ったほか、取材を受ける等の結果、以下のとおりマスコミによる報道があった。

(1) 新聞報道、広報誌掲載

(24回)

掲載日	掲載紙(誌)	タイトル	内 容
4月24日 (日)	埼玉新聞	今年は立派に さいたまの荒川 アユ遡上始まる	東京湾からの天然稚アユの遡上が荒川で始まった。秋ヶ瀬堰から上流には上りにくいため、1999年から堰下流の定置網で稚魚を捕獲。9日から稚魚漁が始まった。稚魚漁を指導している県環境科学国際センターの金澤光は「昨年に比べて、今年の稚魚は魚体が大きい」とコメントした。
4月24日 (日)	埼玉新聞	熊谷の清流 いつまでも ムサシトミヨ守る会総会	熊谷市ムサシトミヨをまもる会の定期総会と講演会が熊谷市で開かれ、県職員、会員らが参加した。特別講演会では県環境科学国際センター金澤光が「ムサシトミヨの分類」について解説。ムサシトミヨはトミヨ属トミヨに分類された話だが、記事では学名が決まったと報道。4月30日付け【訂正】で学名が決まったのは誤りと訂正された。
5月 8日 (日)	埼玉新聞	改良重ねアユ遡上確認 川越 新魚道設置の菅 間堰	県が進めている飯能市までの入間川の魚道整備工事で、最後まで残っていた川越市菅間堰の新魚道が完成。1日から6日までアユ遡上調査が行われ、目視で約60尾の遡上を確認。調査した県環境科学国際センター金澤光は「上流の飯能市まで六つの堰の改良が完成し、東京湾の天然アユが飯能まで遡上できるはずだ」とコメントした。
5月11日 (水)	埼玉新聞	アスベスト測定へ 県職員派遣 熊本に見舞金100万円	熊本地震の倒壊建築物の解体や撤去に伴い、石綿含有建材の影響による大気中アスベスト濃度の実態を把握するため、実績のある県環境科学国際センターの研究員2人を熊本市に3日間派遣する。
5月11日 (水)	朝日新聞	アスベスト調査へ、熊本 に職員派遣	アスベスト調査を支援するため、県環境科学国際センターの研究員2人を3日間、熊本地震で被害を受けた熊本市に派遣することを決定した。倒壊建築物解体による大気中アスベスト濃度を把握するため、実績のある当センターに要請があった。

掲載日	掲載紙(誌)	タイトル	内 容
6月 5日 (日)	埼玉新聞	アユ遡上 今年も確認 岩槻区の綾瀬川で7匹	さいたま市岩槻区加倉の綾瀬川で、県の専門家とNPOエコロジー夢企画によるアユの遡上調査が4日、行われた。四つ手網によりアユ、スズキ、ボラなど多彩な魚が採れた。調査した県環境科学国際センター金澤光は「昨年に続きここまで東京湾からアユが遡上していることが確認できた。大きな成果だ」と話した。
6月11日 (土)	埼玉新聞	高校生と魚とったよ 本庄・藤田小河川調査 児童が川幅測定も	小山川と元小山川の水環境を改善しようと、本庄市立藤田小と早大本庄高等学院による河川調査が8日、小山川と元小山川で行われた。調査は10年以上前から行われ、市や県環境科学国際センターなどが支援。同センター魚の専門家金澤光を指導者に迎え、同学院のサポートを受けながら、金澤は「川をきれいにするために何をしたら良いかが体験できる学習会」などとコメントした。
6月27日 (月)	埼玉新聞	東京湾から芝川遡上？ 緑区の農業用水にアユ 専門家ら魚類調査	川口市を流れる芝川で25日、県の魚類専門家や地元の在家小元教師、県南漁協組合員らが、アユを中心とした魚類調査を行った。川口市境の農業用水路でアユが発見され、調査した県環境科学国際センター金澤光は「東京湾から荒川を経て芝川を遡上したアユである可能性が一番強い、用水は見沼代用水東縁から来ており、そちらから下った可能性も否定できない」とコメントした。
7月16日 (土)	朝日新聞	クマ、「多い年」の可能性 県が注意呼びかけ 6月までで前年同期上 回る	ツキノワグマの大量出没について餌となる堅果類(ドングリ)の豊凶と関係があることやクマとの接触事故を防ぐための対処方法について、県環境科学国際センターの角田研究員による解説が紹介された。
7月20日 (水)	日本経済新聞	富士山頂でPM2.5観測 県のセンター 越境汚染の実態調査	県環境科学国際センターでは、7月下旬から富士山頂でPM2.5の観測を本格的に実施する。観測は上海市や韓国済州島でも実施する。自治体の環境研究所では唯一、富士山頂で大気化学を研究している。
7月21日 (木)	日経産業新聞	富士山頂でPM2.5観測 越境汚染の調査	県環境科学国際センターでは、7月下旬から富士山頂でPM2.5の観測を本格的に実施する。観測は上海市や韓国済州島でも実施する。自治体の環境研究所では唯一、富士山頂で大気化学を研究している。
7月31日 (日)	産経新聞	富士山頂でPM2.5観測 開始 県研究機関が越境汚染 調査	県環境科学国際センターは、富士山頂で、PM2.5の観測を始めた。富士山頂は地上の大気汚染の影響を受けず、上空を数千キロ飛んできた大気汚染物質を調べるのに最適とされる。
8月 2日 (火)	埼玉新聞	アユすむ清流「復活」 川口で市民団体 緑川で発見、遡上か	川口市前川を流れる緑川で7月31日、「緑川を豊かな環境にする会」が生き物を調べる「川ガキ体験」を行い、アユとオイカワが見つかった。アユについて県環境科学国際センターの金澤光は「上流には水門などの施設がある。下流は堅川から新芝川を経て荒川本川につながっている。東京湾から荒川を経由して遡上した以外考えられない」と指摘した。

掲載日	掲載紙(誌)	タイトル	内 容
8月 3日 (水)	日本経済新聞	サイエンス教室高校生とコラボ 県環境科学国際センター	県環境科学国際センターは6日、県立不動岡高校(加須市)の理科系クラブによる小中学校生対象の出張サイエンス教室を開く。当センターの研究員が監修し、化学部が化学反応で液体の色を変化させるショーを実演する。
8月 4日 (木)	毎日新聞	小中学生対象科学イベント 加須で6日	県環境科学国際センターは6日、地元の県立不動岡高の生徒らが小中学生を対象に科学の楽しさを伝える体験型イベントを開催する。サイエンス教室では、天文部による簡易型プラネタリウムを使った星空解説などがある。サイエンスショーでは、化学部が化学反応による液体の色の変化について説明する。
8月 5日 (金)	埼玉新聞	不動岡高生が出張科学教室 あす、加須で開催	環境や科学について楽しく学んでもらうため、県環境科学国際センターは6日、県立不動岡高校の理科系クラブによる出張サイエンス教室を初めて開催する。センター研究員が監修する化学部のサイエンスショーや天文部とスーパーサイエンスクラブ(物理班、数学班)による入浴剤ロケット作りなど参加体験型イベントを実施する。
8月 6日 (土)	朝日新聞	高校生が「出張サイエンス教室」きょう加須で開催	不動岡高校の理科系クラブの生徒たちが6日、県環境科学国際センターで「出張サイエンス教室」を開く。化学部によるサイエンスショー、天文部とスーパーサイエンスクラブによるサイエンス教室がある。
8月10日 (水)	埼玉新聞	ラグビーW杯 暑さ対策活用 暑い熊谷で集中気象観測	「ラグビーW杯暑さ対策活用 ー暑い熊谷で集中気象観測ー」として、熊谷スポーツ文化公園を対象に、文部科学省事業の一環として県環境科学国際センターと海洋研究開発機構、筑波大学等が共同で実施した暑熱環境観測が紹介された。
8月11日 (木)	日本経済新聞	熊谷で集中気象観測 県環境科学国際センターなど「暑さ対策」で	「熊谷で集中気象観測 ー県環境科学国際センターなど暑さ対策でー」として、海洋研究開発機構が実施する地球シミュレータを用いたヒートアイランド模擬実験に活用するために、環境科学国際センター、海洋研究開発機構、筑波大学等が共同で実施した暑熱環境観測が紹介された。
10月 6日 (木)	埼玉新聞	クマ秩父地域で出没多発傾向 負傷2件 県、注意呼び掛け	ツキノワグマの大量出没について餌となる堅果類(ドングリ)の豊凶と関係があることを県環境科学国際センターの角田研究員が解説した。
10月 7日 (金)	毎日新聞	温暖化対策「適応」重要に	「温暖化対策「適応」重要に」として温暖化適応策が紹介されるとともに、適応策の先進県として埼玉県が取り上げられ、県環境科学国際センターの取組が紹介された。
11月 1日 (火)	埼玉新聞	川の生物食べて調査 ボート乗船、水質も観察 八潮の大曽根ビオトープ	綾瀬川の自然環境に関心をもってもらおうとNPO法人エコロジー夢企画は八潮市大曽根ビオトープで川の生き物や昆虫などを調べるエコ夢探検隊を開催した。ビオトープで採取したテナガエビを素揚げにして味わった。県環境科学国際センター金澤光は「川の環境を知るには川の水を飲むのが良いが、飲めないので食べられる生物で環境を感じてもらった」と説明した。

掲載日	掲載紙(誌)	タイトル	内 容
2月18日 (土)	朝日新聞	県の魚ムサシトミヨ生息地 専門家と歩く 少ない水草 川底は露出 上流で半減 下流にヘドロ	野生では世界で唯一熊谷市の元荒川上流部だけにすむ「県の魚」で、推定生息数が大幅に減少しているムサシトミヨ。今月上旬、元荒川上流部約2kmの生息地を、専門家と一緒に歩いた。熊谷市ムサシトミヨをまもる会の技術顧問で県環境科学国際センター金澤光は「危険な状況。生息数を回復させるのは一筋縄ではいかない」と話した。
2月18日 (土)	毎日新聞	希少魚ムサシトミヨ 小中3校が繁殖報告会 熊谷です	熊谷市の元荒川上流部だけに生息し、近年大きく減少していることが分かった希少種「ムサシトミヨ」の保護活動に取り組む「熊谷市ムサシトミヨをまもる会」が19日、熊谷市で繁殖活動の報告会を開く。報告会では、3校の生徒が活動内容を発表。長年にわたり調査に携わってきた同会技術顧問で県環境科学国際センター金澤光による解説もある。

(2) テレビ放映、ラジオ放送

(5回)

放送日	局名	番組名(タイトル)	内 容
6月20日(月)	テレ玉・テレ玉ニュース	武甲山の岩場に自生するミヤマスカシユリを展示	秩父にある武甲山の石灰石の割れ目に自生する貴重な植物「ミヤマスカシユリ」が、埼玉県庁で展示されている。このミヤマスカシユリは、県環境科学国際センターが保護・増殖したもので、県庁のほか、同センターでも展示されていることが紹介された。
8月10日(水)	FM NACK5	モーニングスクエア	朝の情報番組で、8月10日付埼玉新聞記事「ラグビーW杯 暑さ対策活用 暑い熊谷で集中気象観測」の内容が紹介された。
12月20日(火)	TBSテレビ・あさチャン	中国のPM2.5赤色警報にコメント	中国北京でPM2.5の高濃度が観測され「赤色警報」が出されたことから、日本の環境基準の10倍以上となる高濃度の発生が懸念され、日本への影響も大きい可能性があるとのことで、日本への影響、PM2.5の発生や輸送の機構、人間の健康への影響などについて畠山総長が説明した。
1月19日(木)	FM NACK5	モーニングスクエア	2月3日(金)に開催される県環境科学国際センター講演会の参加者募集のお知らせ。
2月15日(水)	香港Phoenix Satellite TV	中国のPM2.5と日本の関わり	中国北京でPM2.5の高濃度が継続していることから、日本への影響、PM2.5の発生や輸送の機構、人間の健康への影響、対策技術、日本からの技術的な援助の効果などについて畠山総長が説明した。

(3) ミニコミ誌等

(7回)

掲載日	掲載誌	タイトル	内 容
4月1日(金)	じゃらん5月号	2016ゴールデンウィーク特別企画	GWイベント特集で、県環境科学国際センターGW特別企画の開催日時や参加方法などを紹介。
7月26日(火)	埼玉マリオン	サイエンスショー化学反応	8月3日に開催される夏休み特別企画「サイエンスショー化学反応」の開催日時や参加方法などを紹介。

掲載日	掲載誌	タイトル	内 容
8月22日(月)	とねじん9月号	身近な物の中の化学物質を調べてみよう	9月25日に開催される県民実験教室「身近な物の中の化学物質を調べてみよう」の開催日時や申込方法などを紹介。
11月18日(金)	ばど	埼玉県環境科学国際センター「生態園」	紅葉スポット特集の中で、県環境科学国際センター生態園を紹介。
1月 1日(日)	たまログ浦和版 Vol.96 2017 1月号	埼玉県環境科学国際センター講演会「今、災害・事故等に求められる環境研究所の役割」	2月3日に開催される県環境科学国際センター講演会のお知らせ。
1月 6日(金)	地域新聞ショッパー 大宮・さいたま新都心 2017新年号	2月3日に埼玉県環境科学国際センター講演会	2月3日に開催される県環境科学国際センター講演会の参加者募集のお知らせ。
3月31日(金)	E・N・S通信 No.22(NPO法人環境ネットワーク埼玉)	科学に基づく”正しい理解”を	PM2.5は私たちの身の回りの多くの発生源から排出されている。関東地域では、越境大気汚染よりも、国内で排出された原因物質の影響の方が多いため、正しい理解とフィールドでの研究が大切であることを説明した。